

令和元年6月22日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16845

研究課題名(和文) 村落文書を活用したベトナム中部地域社会史の研究

研究課題名(英文) Study of social history in central Vietnam using village documents

研究代表者

上田 新也 (UEDA, Shinya)

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：00713538

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：現代ベトナム社会においては、前近代に形成されたと推測される強固な地縁集団や父系親族集団は依然として生活レベルでは強い社会的影響力を持っている。本研究ではベトナム中部フエを周辺域において史資料の調査や撮影を行い、これらの社会集団が近世ベトナムにおいてどのように形成され、それにより郷村社会のありようがどのように変化したのかを検討した。そして本研究により「伝統社会」成立前のベトナムの郷村社会は東南アジア的特徴を色濃く残していたが、農業開発の進展により人口が飽和状態となるにつれて、住民の既得権益を保護すべく、儒教を媒介として閉鎖的な社会集団が発展していったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、急速に発展する日越関係とは裏腹に、日本におけるベトナムを含む東南アジア理解は全く進んでおらず、無理解かつ無礼な言動を見聞きすることも珍しくない。本研究の成果をまとめた専著の刊行が、日本人のベトナム社会理解の改善の一助となれば幸いである。

また日本の前近代ベトナム史研究は高いレベルにあり、古代～16世紀頃については世界的にも最先端とされている専門書が既に出版されている。本研究で17～18世紀を主題とする専著が出版されたことにより、日本人の研究により18世紀までの「通史」的なものが、一応は出来たことになる。残る19世紀のベトナム(阮朝)に関する最新の研究が刊行されることが望ましい。

研究成果の概要(英文)：In present Vietnamese society, strong village communities and paternal kinship groups, which are presumed to have been formed in premodern times, still have strong social influence at the living level. In this study, we investigate historical materials in the rural area of central Vietnam, and examine how these social groups were formed in early modern Vietnam, and thereby how the rural society changed. And according to this study, the Vietnamese rural society before the establishment of the “traditional society” has remained Southeast Asian characteristics, however as the population became saturated due to the progress of agricultural development, various closed social groups developed through Confucianism in order to protect the vested interests of the people.

研究分野：近世ベトナム史

キーワード：近世ベトナム 村落文書 小農社会

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

これまでのベトナム社会史研究は主として北部の紅河デルタと南部のメコンデルタを中心に進められてきた。この背景には、紅河デルタの場合は稠密な人口を背景とした小農主体の村落共同体群、一方メコンデルタの場合はコメの国際商品化を背景とした急速な開発と、フランス植民地政府の土地払い下げ政策に起因する大土地所有の進展という際立った社会的特徴があったこともあるが、ベトナム国内では北部と南部が相対的に研究環境が整っているため外国人研究者の留学も両地域に集中しがちであるなど実際の理由による部分も大きい。

しかしベトナムの両極に位置する紅河デルタとメコンデルタの社会史研究が進展するほどに中部の社会史研究の欠如が問題となってきている。それは既に多くの研究により、閉鎖的メンバーシップを基本とする地縁・血縁集団が発展した北部と、流動的・開放的な社会である南部という相違点は明瞭になっているものの、両地域の社会的特徴をつなぎ合わせて全体像を示すことが出来る研究がないということである。多くの研究は両地域の相違を人口過密な社会と人口稀薄な社会の違いとして認識しているようには思われるが、人口稀薄な移住民の社会が発展して過密状態に達した時に、果たしてどのような社会的変容が起こるのかという点について実証的な歴史研究は未だなされていない。この結果、ベトナム社会史研究は北部・南部に摺り合わされないまま二分化され、全体像を描く事が困難となっている。社会史研究が南北に二極化してしまったことが招いた弊害である。このような状況を受け、近年ではベトナム中部の歴史研究に着目した研究もリタナ氏の研究に代表されるように徐々に現れてきているものの、それらの研究は広南阮氏の南進政策や交易といった対外的側面の分析に片寄っている。またベトナム地域研究に大きな足跡を残した考古学者の西村昌也氏がフエ研究にも端緒を付けたものの残念ながら早逝されており、本格的な社会史的研究は未だなされていない。

### 2. 研究の目的

上記のような現状を受けて本研究ではベトナム中部、特にフエ周辺域を社会史的見地から検討するものである。この地域を選んだことには幾つかの理由がある。第一にフエ周辺域の歴史を見るに、移住民の社会から人口過密な社会への変遷が比較的検証可能な時代において見られるという点である。もともとフエ周辺域は 15 世紀までは海上交易により繁栄したチャンパの勢力圏であったが、15 世紀末に黎聖宗のチャンパ遠征によりキン族(現在のベトナムの主要民族)の支配下に組み込まれ、その後キン族の入植により急速に農業開発が進んだ地域である。17～18 世紀の分裂期にはベトナム中部を根拠地として南進政策を積極的に推進した広南阮氏の首邑が置かれ、19 世紀に阮朝が統一するとフエに首都が置かれるに至る。このようにフエ周辺域は 15 世紀末以降に急速にキン族社会が発展した地域であるが、少なくとも 18 世紀末の時点で南部からの移入に頼るコメ不足地域となっている。つまり 15 世紀より 19 世紀までの社会状況を検討することにより、メコンデルタ的社会状況から紅河デルタ的社会への変遷を追うことが可能である。第二にフエ周辺域はこれを検討するのに必要な史料が非常に豊富である。フエ周辺の集落には漢字・字喃史料が大量に現存しており、この点で村落文書があらかた消失してしまった紅河デルタや、そもそも前近代の史料に乏しいメコンデルタとは大きく異なる。これによって史料的制約は大幅に軽減される。

これらを踏まえ、本研究では特に以下の諸点につき検討を進める。第一にフエ周辺域における 15 世紀以降のキン族の入植と農業開発の進展、その後の農業開発の限界とこれに伴う村落共同体や親族集団の変容について検討を進めていく。申請者は、これらについてフエ近郊のタインフック集落について既に検討しており、同集落が 15 世紀末に黎聖宗がフエ周辺域を支配下に取り込んだのち、防潮堤の建設により可耕地が創出されたことにより成立した集落であること、耕地拡大の限界にともなって次第に閉鎖的空間へと変質していったこと、これが儒教の普及と表裏する現象であったことを明らかにした。しかし分析があまりに個別事例的に過ぎ、地域社会全体の分析は行っていない。これを踏まえて本研究では調査対象域を面的に拡大する。第二に水上民や職人集団など農業以外の生業を持つ人々についての検討を行う。タインフック集落の事例にも見られるように、キン族の入植にはフエ市街北東に広がる広大なラグーンの開拓によるところが大きい。そこに居住する水上民は、支配者である広南阮氏期には水軍の一部を構成していた痕跡があるが、阮朝期には積極的に定住政策が進められるようになる。フエ周辺の地域社会を明らかにするためには従来は看過されてきた水上民や漁労民の存在も分析に取り込む必要がある。一方で広南阮氏～阮朝初期には職人集団の入植・移住も盛んに行われている。特に広南阮氏はリタナが指摘するように職人集団を軍事組織の一部として編入しており強力な統制を加えていた。現在もフエ周辺には彼ら職人集団に起源を持つ集落が幾つか現存しており、これらを検討することにより地域社会の形成・変容の中に支配政権も分析視角の中に取り込むことが可能となる。これまでのベトナム史における社会史はもっぱら農業集落、農業開発を中心に行われてきたが、本研究では水上民や職人集団といった非農業集団を分析に取り込みつつ多角的視野から地域社会を検討することを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究はフエ周辺域の中でも、特にフオン河下流を中心としたラグーン周辺域に注目してキン族の入植による農業開発の進展を検討する。同時に水上民や職人集団といった非農業集団にも注目することにより、多角的な視点から 15 世紀～19 世紀のキン族社会の形成と変容を明ら

かにする。具体的には土砂体積により陸進が著しいフオン河河口域において2年間かけて史料調査を行い、キン族の入植状況と水上民との関係、それに対する支配政権の対応について検討する。またフエ周辺の手工業村を中心に史料調査を行い、フエ周辺域における手工業の発展について検討する。これらの作業を通じてフエを中心とした地域社会を立体的に明らかにし、最終的には紅河デルタ、メコンデルタなど他地域のキン族社会、あるいは東南アジアの他のデルタ地帯と比較しつつ、キン族社会の特徴と全体像を明らかにする。

#### 4. 研究成果

##### (1) 史料調査の実施地域

本研究において調査を実施できた集落は右図のようになる。赤字で記した清福集落は以前より本研究の実施者が調査を行ってきた集落であるが、そこから主に西側へと調査地域を拡大した。



以前より調査を行ってきた清福集落については、おおむね史料の収集が済んでいることもあり、新たな史料が大量に見つかるといえることはなかったが、調査地域を拡大した結果、周辺集落においても清福集落に勝るとも劣らない前近代史料が大量に現存していることが判明した。予想以上に現存史料が多いため、

2年目以降に予定していたフオン川東岸域やフエ市街東郊の地域にまで調査地域を拡大することは断念せざるを得なかった。今後の継続的な史料調査が必要である。なお、本研究において撮影した史資料の概要については既に学習院大学での学会（下記参照）において報告済みである。

##### (2) フエ周辺の氏族、村落共同体

上記のように予想以上の資料の膨大さから調査実施地域のさらなる拡大については断念せざるを得なかったが、調査における聞き取り調査や撮影史料からは北部の紅河デルタとは異なる様々な特徴が見いだされることが判明した。特に北部の紅河デルタ村落においては、通常はラン（Lang）とよばれる地縁集団の中核的な施設として亭（Dinh）と呼ばれる集会所的施設が存在しており、そこには城隍（Thanh Hoang）と呼ばれる集落の守護神が祀られている。本研究の調査地域においても各集落に亭が建設されている点は共通する。しかし調査地域では亭は存在しているものの、紅河デルタと比較すると、全体的に「箱ものだけ」という傾向が強い。集落関連の行政文書が亭に現存していることからして、亭が行政的中心であったのは間違いないが、祀られている神位はとってつけたような雰囲気がある。一方で集落内に居住する各氏族の始祖は同時に開耕神とされ、亭の傍らに別に祠廟が建設されているケースが多い。これも紅河デルタの集落には見られない特徴である。村人の伝統儀礼では亭に祀られた城隍に対する祭祀よりも、その傍らに祀られた村人それぞれが帰属する氏族の始祖（＝開耕神）の方が祭祀の中心となっている。これは阮朝期に集落運営の拠点として行政の指導の下に亭が建設されたものの、実際の宗教実践においては、それ以前より行われてきた血縁集団を中心とした祭祀が、そのまま継続されたことによると考えられる。

これはキン族社会の亭を中心とした地縁集団の成立を考える上で重要な示唆を与える。調査地域の事例を見る限り、亭とは郷村社会において自発的に発生した地縁集団が自主的に作ったものではなく、阮朝の郷村社会統治の拠点として上からの指導によって建設されたものと考えざるを得ない。在来の郷村秩序という意味ではむしろ血縁集団を中心としたものがメインである。つまりランと呼ばれる亭を中心とした地縁集団は、従来の研究に言われてきたような外部権力（ベトナムの学会では「封建勢力」、桜井由躬雄氏の研究では「中間権力」）に対抗するために発展したものではなく、むしろ「上からの改革」、つまり行政側が郷村社会を再編成する過程で生まれたものと推測される。

以上については既に学習院大学での学会（下記参照）において報告済みである。

##### (3) 北部研究との接合

上記のような調査地域における亭の成立は、従来の研究で行われてきた階級対立的な歴史観に疑念を抱かせる。実際、紅河デルタの集落では、集落内の祠堂（デン、Den）に祀られた祭神が、同じ集落内の亭にも城隍として祀られているという事例や、亭の建設に伴って祠堂に祀られていた祭神が亭に遷座したと推測される事例が散見する。これらを集落側の自発的な行為として理解しようとする、その動機が不明瞭とならざるを得ないが、調査地域における亭の成立を考慮すると、容易に理解できる。調査地域では主に19世紀に入ってから阮朝によって亭を中心とした郷村社会の編成（ないし再編成）が行われているが、恐らく紅河デルタの場合、そ

れと同様の施策が17～18世紀の黎鄭政権期に先んじて行われており、「上からの改革」により亭を建設したものの、そこに祀る城隍がないために、それ以前より集落内で祀られていた祭神を亭へと移行させたものである。それらの亭の城隍は、本研究の調査地域と同様、恐らく当初は「取ってつけた」ものであったのであろうが、紅河デルタの場合、集落にもよるがその後200～300年という年月を経過する中で、歴代政権による勅封の授与、神蹟の編纂などによって、それなりに血肉の通ったものとなっている。しかし本研究のフエ周辺域の場合、それが19世紀前半という比較的近い時代に行われ、そのまま近代へと突入してしまったために、結果的に「取ってつけた」ばかりの状態が血肉を通わせる暇のないまま現代にまで至っている。このようにフエ周辺域は、紅河デルタにおいて「近世伝統社会」が成立する以前のキン族社会が、いかなるものであったのかを知るうえで、重要な知見を与えてくれる。

以上の詳細については下記の専著（下記参照）を参照されたい。

#### (4) 園簿の分析

本研究の調査においては、亭や族祠堂において勅封、丁簿、地簿、家譜、土地売買文書など数多くの史料を撮影することができたが、管見の限り他地域においてあまり類例のない史料も見出された。その代表的なものが「園簿」である。これは18世紀末～19世紀中ごろの居住区の利用状況や家屋所有状況、売買状況が記録された珍しい史料である。強いて類似の史料を上げれば田土の耕作状況を記録した阮朝地簿に近いが、居住区について同様の記録をしたものは他に類を見ない。以前の清福集落の調査でも2件の「園簿」が見いだされたが、初見の史料であるうえ、保存状態が悪いために理解不能な部分も多かった。本研究の調査では安城集落において、より保存状態が良好かつ詳細な記述を持つ2件の「園簿」を発見することができ、ようやく史料の編纂目的や内容の分析が可能となった。現在、これらの史料の検証を鋭意進めているが、これにより19世紀前半の家族形態や財産継承について、かなりの精度の分析が可能であり、19世紀前半の調査地域では、妻方居住婚や女性への遺産相続がかなり広範に行われていたと現時点では推測している。

以上については一部分を東京大学での学会（下記参照）において報告済みである。また現在、英語論文を準備している。

上記の各論点は東南アジア的な「ルースな社会構造」から閉鎖的かつ固定的メンバーシップを持つ社会集団を基調とする社会への変容を解明する重要な手掛かりとなるものである。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

Ueda Shinya, Nishino Noriko, The International Ceramics Trade and Social Change in the Red River Delta in the Early Modern Period, *Asian Review of World Histories*, 査読有, 2017, pp.123 - 144.

上田 新也、19世紀前半ベトナムにおける家族形態に関する一考察 - 花板張功族の囑書の分析から -、*アジア遊学*、査読無、第191号、2015年、pp.274 - 289

上田 新也、ベトナムの村落と地方文書、*歴史評論*、査読無、第783号、2015年、pp.37 - 47

Ueda Shinya, On the Financial Structure and Personnel Organization of the Trinh Lords in Seventeenth to Eighteenth Century North Vietnam, *Journal of Southeast Asian Studies*, 査読有, vol.46, no.2, 2015, pp.246 - 273.

〔学会発表〕(計3件)

上田 新也、フエ近郊集落における家族形成 - 18世紀後半の『園簿』の分析 -、日本ベトナム研究者会議2018年度後期研究大会（東京大学）2018年11月。

上田 新也、阮朝期フエ周辺域の村落文書、*於阮朝地方アーカイブズの世界*（学習院大学）2016年11月。

Ueda Shinya, Acceptance of Confucianism and Transfiguration of Family Structure in areas around China: An Example of Early Modern Vietnamese Society, at: *Globalization from East Asian Perspectives*, Osaka University, 2016/3.

〔図書〕(計2件)

上田 新也、大阪大学出版会、*近世ベトナムの政治と社会*、2019年3月、402頁

上田 新也 他、Nxb Khoa hoc xa hoi, *Lang xa Viet Nam va Dong Nam A trong thoi ky hoi nhap*、2016年、258頁（担当143 - 185頁）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

上田 新也（監修） 上田 麻衣（作成） 大阪大学文学研究科東洋史研究室、『漢喃文刻拓本総集』（vol.1 - vol.22）簡略索引、2017年、152頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：チャン・ヴァン・クエン  
ローマ字氏名：Tran Van Quyen  
所属研究機関名：フースアン大学  
職名：講師

研究協力者氏名：グエン・クアン・チュン・ティエン  
ローマ字氏名：Nguyen Quang Trung Tien  
所属研究機関名：フエ科学大学  
部局名：史学科  
職名：教授

研究協力者氏名：グエン・ヴァン・ダン  
ローマ字氏名：Nguyen Van Dang  
所属研究機関名：フエ科学大学  
部局名：史学科  
職名：教授

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。